錦

小一里

中

へ13
3012
5

へ13
3012
5

昭和九年
七月九日
購求

ノ壹

遊仙奇遇錦の里巻之五

江戸　爲永春水作

第九回

イヨウ　暖帝ガ出来よつさま　ありやうく出来さあ濱ばぢれ〳〵
くゝあそぶてへ　「イヤ濱ば姫さんあるゝ〳〵のうでぐぎのまんなかに
きさ氏土地でどざのまするう　「ナニ方様でも赤のぐる澤井の方
も陽り花うんの鮮ガ出りけて来く押地ゝ〳〵ぼ
所氏迎出して・座の方へ案て・推んで居るのサ　「エ・あの様

この世の
ひさぎの花でございます
まさしくお兼さんの四隅長屋はさぞ大勢お
ざいますそう昨日の兼さんの地図ぐ
浦島の花ア咲
掛けく長ますねへ　清　花く　彩ア　深井ア　ひち地へ出
て来る途中で祝ア　一年惜ふ女の容姿ア清くく
やうご彩ア　新造ふ
清雅さんの花ふ他人ア
二ツキ二中ノ一

ふのごトいの花　喧嘩　帝成ぐ
ア第る男肩へ浦島の
そうけ　丁子車の歯　磨成老ひみがく
入第り清雅
「ヲヤ　見ア　おめづく　ちうございますと　ア　藏　掛ようう　清　イヤ　見ハ
熊さん　後ふ久ちくお見ふかくらるんござる　熊　「ア　宮ア　一
年ぶかりお見ふかくません　何ア　モシ　彩ア　まさ　ア
長屋をお掛へ義まくふ　繁　「ア　まさ　拾び　所ふ　仕掛と　ア
ちく　熊　「そまやア　ちれさるサ　ア　張熊さんア　ア
ア　ア　ア　

何ものも麁ガ麁ク成ル酒のまるものと女のるすハ具足を脱ヘ
のけ　しぶん　除く自分ガ先ヘ手を出ス　然「コウ〳〵唖方ハ知ッテるのぢ
めるイウ　清「アハ〳〵大ッこと女の言葉でも　あらごらう全体然さ
んガ好男ぢゃ〳〵　好男　繁市「モシこと様ぶこと成ル程
と然ことうガ付こッていけません　然「イエモシ女の好ことこと
此家の親方でございまを何でもア　清「あきれふさをつくまさ
しらの客ハ市ぽんハ限るぢやアございません　清「市ぽんハ
客人ガ為合て呼ばるまさとの人ハ仕ものの

あるのガ嫌ひな方でハ　然「さんハまさ　清「百工家業
ガ出来ものハとちまさそうぢ　繁市「アハ〳〵あるわど　然「とうに十
分ことを世せるものハ出来ものの　九山ぐも　清「ずハあるまらめん
清「アハ〳〵ごうぎハ　然「ナアニ　あまるイウ　自分のことを
引義べく為るのでございまを　清「トキニ　然さん　家ハ　ごと
美言　あ門さらうま　此ハ一度ことあぢ　然「イエナニ　此ハ
三ウ　津国屋ハ止まること　何様も師匠ガ　ございません　あのチ
何でもよく　然ることぜ　あぜ　師匠ガ　れこと　いのごらう

あん
解まり大きさン 絵「ナニサ 稽古の為い義経さのでハ有ん
然と お師匠さんらしいのが 拵へと言ごアナ 市「ちぜまでやア
窮屈でいけめへ ぢやアねへら 絵「ナニ 其程で赤いノ子を 今義経
ふなりさ 豊さ義経を 祝れへ ふ 義経が上手で 稽古が叮嚀で
万事涙切でまいとあ 気隠者の 拵へ 師匠で 家が幸さ
アナ 市「お 絵さんが 師匠 成 上手 お 前も 稽古 面白出
ひ切 ふの 唖 方ふ 信切ざノ 絵「分 出 義経を 師匠 上手 義

老ふ ぢかり 出るのろ子 絵「ナニ 娘子供ハ 彩めべを こえて
ふまてまいけれど 男の 男ふハ 形りサ 市「その ちがぢアア
年 絵さんで 憑〳〵 ふと 長ふ 絵「今 子 拵ふ気
出 人が あけまべ ちを 今の 人 お義ッ子の 面白へ
出へ成 成 新 の 拵ふ 長ふ の ハ 絵さんぢ
アアごア 市「そまてぢやア お 前ハ 知 長ふ ぢらうが 一
時 縁日の 拵木 屋で お 待 拵 方で 延 ら

く　敬よ　教害る　所で　あつさの紙　桂木の様が　こ紙
また　危ふくも　助りの　さのふたつふ所の　壁ぐこ　云ふ
こ紙　笑ぐ　何様　あつる　世さア　入組ご　意振で
もあるまつろ　何ふも　あ〳〵　様へこ紙　笑ぐこと
も　あれが　評判の　男様ひの　壁が　香る　嗅紙さ
まつこと　かふひそうぐ〳〵　笑て　亜が　何様　海ぐね
然へ十二　何様も　海の　海　様へのこ云ふも　あるめへ

ぢやア　様へう　自己ア　まぐお　義さんの　面へ　まつ人　ふも
仕やア　仕様へぐ　彼仕へ　潤乳で　碎く　毎時　自双振
をつまつのぐ　癖ごこよ　自己ア　あの　晩ふこ　仕ぐ　屋〳〵
きく引く　仕まつの　紙　廣小路で　見こぐ　今　彼屋〳〵
きの　考に　笑こう　あ面へ　退　送つまつこと　ヨ　乳のこ　様へ
海ぢやア　ね〳〵つるア　市へハア　こ様　世つ　ぢやア
お〳〵さんぐ　性の　考いつる　で　こて　侍ふ　教こと　様つ

移ふ 評判成 するうゝ 彼獣が 迷惑ごノウ 然へ 右様ヨ
そまでゝ あまぶ 考程 彼獣よ 右様ごアナ 武年
も 結構で 長らまるのんぢやア れへうう 是非 亭主を 結
ぐいと 市へ 熊さん成 家内へ 入まび 結婚と 云 熊ごらふ
然へ 全 遠慮へ イヤ 戦云ハ 命も 角も 実ニ ふ男 武
くら 長るうう 可愛そうごせ 市へト 表向ハ 云て 長るンごらう
然へナア二 仲様ゝ 然へア ハゝ 熊さんが わかゝ びむかし

ブ系
強へうゝ 他人のゝ成 分ふ引 結て 市津ゝ あるゝ 形
も 市へト ゆつくりふ 聞きうゝ さ ありごて 久ゝぶりで 市
さんに 結て 世間ハ 男ぶりが よく あつゝ 様ご 然へイエ
モし 聞ハ 市さんふ 隠りまて ちまで 女が 好でれゝ 様
が 仲様も そまで ちまゝ 市へ 二十様ゝ 成ハ ゝ 月
代で うんせつけゝ ぜ ゝ 今ふ まゝ 迎合て 来ゝ ハナ 然へイ
ゝ 方も ゝ ごト 聞へ 結ゝ ゝ ひなゝ 結ふ むゝ ひ

然へ呉れこそ〳〵南分此方でござへまもら（法）へ有れサどう
あまもせうち私のみ〳〵極〳〵私とも高まもせん高し
アまもごみ日や十月ハ長まもせうヨ空極ひふ来みせん（然）へ
至ありがとうございまもそそまでみ行私もお暮きんと遠の
て今の呉れハ暑ッ〳〵のぼれ姓ざら〳〵乗りみんうご
ざのまん〳〵まも舞おそ〳〵んあハ極ちふあ出ち成塗事で
毎日お目ふかりてお渡の時ゆんでハ毎度同事に帰〳〵

おめ〳〵ひナまもぶ伝ッ〳〵窮屈ぐ〳〵ハあぐ〳〵れま
せん（法へナハニ）外だりもれが行屋れへなりそ私ゑむ
ぐ〳〵ハ人ゑでも私へハナそまにまもとあそと高〳〵あの
通りの使私ぐ〳〵極やうるのが極ぐハる市へ撮ふえれ
の私お壊でござのまもれへ（法）イエ極りおそんなぐうら
扱も舎外も呉まもく除めんみ〳〵て垂のサイヤたきにお
やうまも〳〵トいとる元〳〵て嗅事成ぐやう〳〵ぶ三止まりて

然よ向ひ　清「然さんお前今見いそぐ〳〵ゆく　然「イエ
何ぞ用がございますか　清「十二用はあのが仏様に
ぶら〳〵向ふ岸の方へでもぶら〳〵　然「おびふ出りけ様のと
思ひのが　牡ぐふおのりろく様へうお前へ乳ぐ様へうの何ぐ
出て見るのサ　然「そりやア五ぐさん何ぐ幸お
仕成して　清「ろう〳〵　隣家の分ぐろう主所ふ奏ろふ
出来様へぜ平岸ろ　ひやとのふ所成芋の田楽ろ焼

の中子で　隣家のぐが然ろる　然「そりや然さん幸ぐア
ぐなる事　然「成ろ成して〳〵ふ子ア初のふ時ふ
出ること　然「〳〵家業ぐろ〳〵あまる人　清「十二お前ぐまさ式
ぐふふ前日ろ〳〵やく〳〵そく〳〵して出りけや世ろト咄〳〵　清
雅八喜の方へ再度ふこ出ぐ様ろもあ主今呼ぐさせ
唄ふのお前あぐやろふ出ぐ主く〳〵味線前主ねせろ八
行く所の産前へ呼〳〵やろん性来の人も子ま主る風俗

清雅さん彩を視合せて「ヤアトいふ事ぶ何の事だ
呂敏さんしく繁結家を視みぐ「帝さん帝さん
まや大そうも早のる事ぶ何のうお出りけり「イ今見
迎夢さんやくもくでるト行るる成無るる事成かける
結へ考へくお師匠さん彩も後刻うしきやまぜ「まやく
彩さんさん彩やり生も元グ身るんず作向くお主ごり
らちちひと視くへ彩ちるる「アハ〳〵俗り初れ業由

仕結へ無ごうる「夏ヤ寒さ夏さ後うしお出ると
翠ちぐ別をゆく「清雅さんあの嬢ハどく
お結如ふなりまるね「結へ方松サ彩ちる事ちる仕事ら
ぐたしう書花ぐ子ちる初ふ迎夢さんとりける

第十回

門イの新内ぶ「行格〳〵縁で彼人ふ変ちる初ちるかとひ
さの弟ふちぐと物ねかく「ちく〳〵清るきちるく。ト

さぞ　ぶぶぜん
手むかへ　泉橋院の門あなる　畫所の　掛屋敷　門
ふ弱とる　世ぎ　▲・■×　「とんざ　美青ざる　今　新屋　屋敷
すぎ　ちとさ　ゆ
ぎとう　生稽せ　拵ぶ　ア　あいうト　ア　ちぶ　ま　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
「かぶて　二人ぶ　ふ　ふ　ふ　紀稽　拵紙　ハ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
で　死ぶ　ぶ　ぶ　

モシ　私ガ中ヘ参リ遣ヘドザイマセウヘ　マシテあの女サ何様モお
義さんのヤウく似く居るぢやアどざいませんカア　私ヨ　新
さまとさこゝ出て此家で一盃かよんあせへ　法ヘそれ
ぢやア　アア　今ア　夜ア　外合て　視ようノ　ウんみ何様もうく
似く居るノウ　然ヘ　われでアア　何様ふ気ふの話者でどざい
ませう　場所柄　嫌なりて　ヨろく　言者もどざいませんガ
所ふも　新ふも　伝やせんぜ　おあゝんゆも　辻番の様る　志

のゞ　在辻番ふも　おあゝん　場うのゞ　あるうんでどざいます
法ヘあんでもいゝゝ　上んあせへ　ちゝしお前のお方ゲ　色
のう　然ヘ上　十二　別座も　何も　生ハいゝやせん　わるアこと　ふ
ぢうで
中　出さゝめサト　言ふゞゝ　料理屋の　芸妓の　二階へ　法
ガ　雅楽すあて　上ゞ　階子の　限ゆて　ヨキヤ　参さんう
何様ゝシジへ　飾りゞョ　不実ゞ　様へ　然ヘ　茶ゝ　小此う
ありゞとへ　ヘ　小此ぢやう　ヨ、　私年の　夜ふ　亟ふの

久しゆりぶとこゝにて茶こゝ限ぢやア来いうく今ふの人ヨひどい
月ふ合こて出るこゝト下ゑ屋の方へ行く
そうぞア紀ごの月ふ合せるッ法へ鯉こうお菊の別深はれ
う鯉ぬぎノウ 鯉「ナニ毎度酒ぞう香ゼ屋ろうこお砂の
ちの
ぞき
こゝ屋ふ人いろる 時浮あやこのうる 法ぐ雅ハこま一個の雅
人形よ市中の物騒ぐ 捕ひく閑法の地ふ陽遊

文亭主人綾継

みやびをぐ
人目つゝ三弦
花の香り
さそ八ま
春ちゆふぐま

して春の花の人の群集せるいとまなくまで祝ふ
の実成さづれて勢ひ多くねは陽遠の如きい法しろと
いふ花の色変りて電情成うたしてそよう多ぶ中緑と成ふ
よりつくそぐらぬ皮の文様ふ鏡の面に横ふて面目
の清雪うつ放ぶるぶくも名所の花成俗所ふ祝く
川うつ山の文様この花所の樹ふ清級うたしてふ
ぬ実ふ一日の旅戦ふ色成その所うたしてたのうと

きうふ不及奢ふ我形ふも画帯の花ふをかざうぶ
ぶふ入くふふ考ひ花を祝下さぶ春ふを知て
情わうが何知り渡の里なうぶる後帰ふ天ある変
あうんやさまぶ清雅ふ能ふ帯に すあらまうる今
青の拝ぶと知ふうとふ必ぶりうぶさすぶふ年ふ
花所の千代をまふて繁成形成言葉ふ松方に栄く
ふふ春成花て祝う春ふ花ふ仰る世のあれ

だこそ　まこと　今日　ようハ　こに　日五〜　後の　酒宴の　席れ
て　よく　ちくらうまいの　まいの　まる　みん　せきも
ふの　咲〜　歌を　姫　例の　お　花を　ものでありうその　名も
ふ　おのこと　ふる　せのが　ふる
似ふる　お方　お　梅　清く　雅を　外抱〜　ゑ〜　お〜の　品に
ふ　ふのるさい　ふの　ふの　ふ
大そうに　お　紙　ふ　ふ　ふ　ま〜と　ふ　ふ　ふ

梅「イエ左様ではございませんそれでもくれ〳〵お出の筈ゝ
お前さんと鶴さんと出しまして お主の成私ハ丹精仕ます
〳〵 清「ナニそれとても嘸ぞ梅「イエ実るのでございます 呂私
の様〳〵のハ芝居さんとろゝ お花さんとろゝ おしでも仙さ
〳〵のハ出るとて お前さんの様な お方ハ一金でも お見ゝ
かゝらまさのでございますヨそれまでけまでもまさ様〳〵の
様な 梅「ハ様でございますもの 沙汰者〳〵

お長さんまれ〳〵 清「ゑぜ〳〵来ることの様〳〵なる 梅「ナニ
何様もいまゝせんが お花さんが 彩様で男を断様に
〳〵て お主の日限が 海まで 毛程ゝかゝ〳〵上さう
ございますヨ 清「ヲヤそれまだ 梅「ヲヤ
うゝ少ハ外変のまりのさぞ 松中で義門て 居るさるごらう
梅「イエ何様〳〵て 弟ひまゝ 初めて お主の時ゝ
蘭紙の差ゝ外変く 居ます〳〵 お花さんとゆゝハ 敬ゝ寺

防ぎ方のお方ごと感心して悔らくうございます
ナヤおぜゆくらくいのご 柿一イ立ちまでゴッテ母子お嘉さん
の様み能男に御らまそしてくれ形ばけをして長さうら
とうて行様くて形ゑるが出来ませう脇様ちくしの
小所と中くの様み男子くこの如中でございます様私
なくがモウ形成破れく神さ衣の罪が為つく形んでも
お嘉さんあくば一厨ひますせんかこゆても私ではえるも者

ぶと出来ませう様くて様ト云ふ安堵と覚致
御きこうまハく通お蔵板所とのそく博所のこお安
ホ様うハすることも出らざる出柿が風情ホ男乳もうつる
ハ易死み様びまこと様ぶこきこの紙お柿の奥成脱物と
視まが出柿ハ所くそうホ外向く新成陽を出対下の光
志死めて根お寿と出ぶちに脇まく様ぶお寿とりの
と獲が加け合めて 浄る浄こりの寿清元延津さが三

味線ゆくさきひかる

ふるもそもつれなくまつふるめでたき春の緒

手ふるもうれしきて路川傍ざくらさそふて笠間

ふるさとの柳もゆるて笑顔で大のりの春の緒

枕詞

アレサモ拾ひのうへ拾がそづまもる

遊仙奇遇錦の里巻之五終